

竹内淳一・吉村晃一・武田保幸・諏訪 剛
 横浜蔵人・「きのくに」船長 藤井一人 他6名

目 的

本県沿岸および沖合の海況と漁況をモニタリング調査することなどにより海況と漁況に関する調査研究の基礎資料を収集し、これらの情報を漁業関係者に提供して漁業経営の合理化に資することなどを目的とする。

本事業は水産庁の補助事業であり、本報告は「平成13年度漁況海況予報事業結果報告書」として既報している。

方 法

平成13年度漁況海況予報関係事業計画概要書にしたがって実施した。

結 果

調査結果は漁海況速報、沖合黒潮調査速報などで速報した。特徴的な海況と漁況の概要は次のとおりである。

1 海況

黒潮（図1、2、表1）：潮岬沖の黒潮は、1月～6月下旬は距岸25～40マイル程度の離岸がほぼ継続した。しかし、1/22-24、2/17頃、4/25-5/1頃、5/15頃、6/2頃-6/5、6/11-12頃には、小蛇行や小冷水渦の北上部が潮岬沖にさしかかり、黒潮は一時的に接岸した。これらの接岸は小蛇行や小冷水渦が通過するとともに離岸傾向に転じている。

6月23日～7月9日頃には、およそ17日間にわたる接岸があった。この接岸は、離岸基調が続いてきたこの時期としては比較的長期間の接岸であった。この後、8月23日までの約45日間は距岸25～40マイル程度の離岸基調が続いた。8月24日～9月25日の1ヶ月余り、潮岬沖の黒潮は接岸した。

9月26日～10月14日は5日前後の周期で離岸と接岸

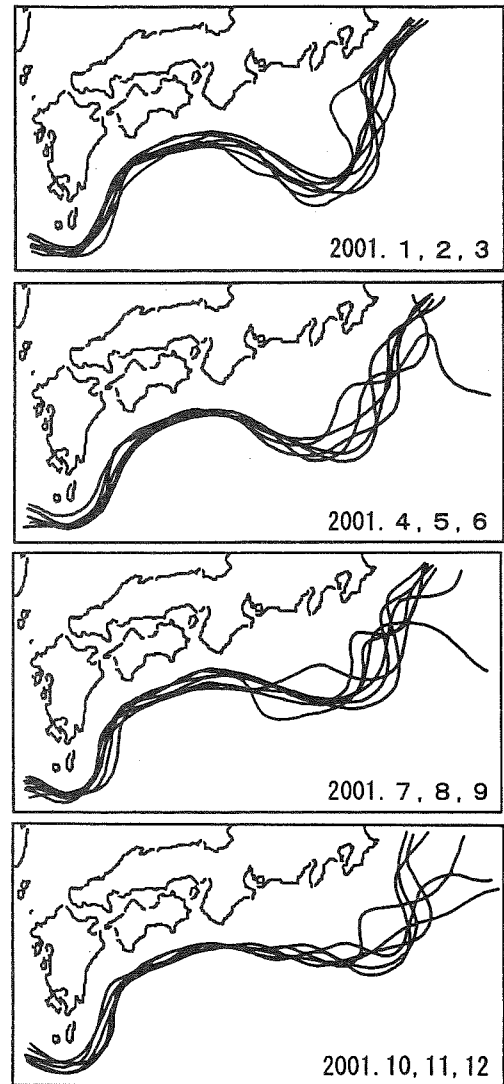


図1 黒潮流路（2001年1～12月）
 水路部海洋速報より。

が繰り返された。10月15日～11月14日の1ヶ月間は継続して離岸した。11月15日頃～24日の約10日間は接岸、その後4日間ほど離岸した後、11月29日頃～12月下旬は接岸となった。

なお、9月下旬以降にみられた離岸は、いずれも距岸25マイル前後の小規模なものであった。このことと、6月下旬以降にしばしば生じた接岸は、1999年9月下旬から継続してきた離岸基調が次第に終息しつつあるこ

* 漁況海況予報事業費による。

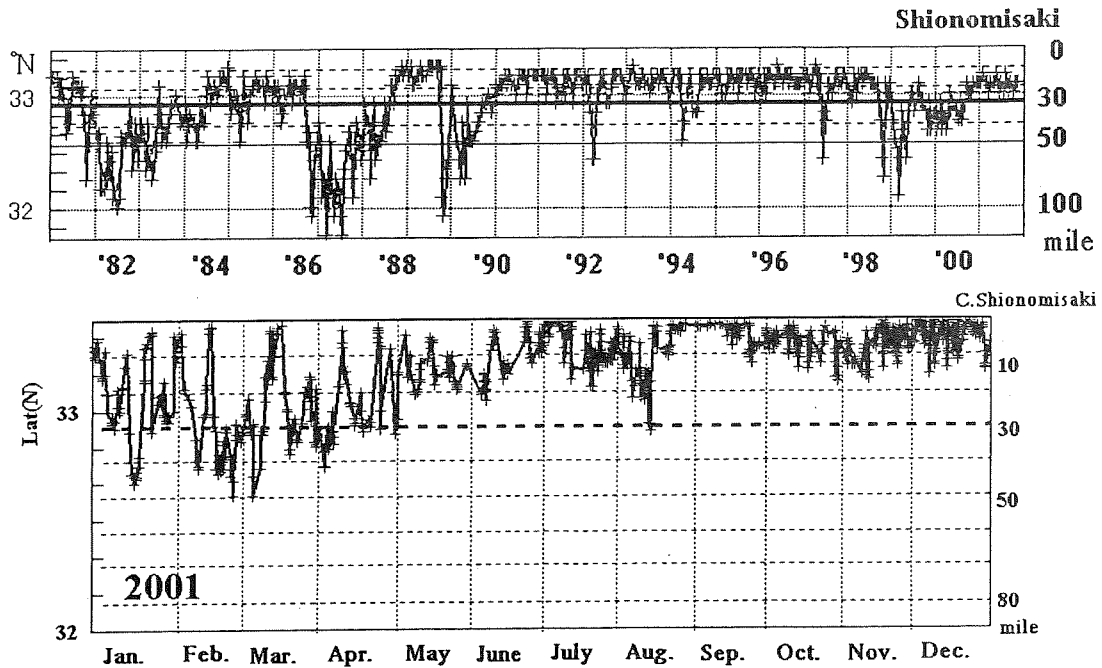


図2 潮岬南沖の黒潮位置 (水路部 海洋速報)
 上段は1981 (S 56) ~ 2001 (H 13) 年の過去22年間の長期変動を、下段は2001 (H 13) 年の経過をそれぞれ示す。

表1 潮岬沖合と紀伊水道 (合ノ瀬) 沖合の黒潮本流位置 (正南距離, マイル)

| 月 | 2001. 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|-------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 潮岬 前半 | *45 | *30 | *35 | *35 | *35 | *35 | *40 | *40 | *20 | *25 | *25 | *20 |
| 黒潮流型 | C | C | C | C | W | C | C | C | B/C | C | D/W | D/N |
| 後半 | *40 | 45 | *45 | 40 | 25 | 15 | 25 | 10 | 15 | 20 | 10 | *20 |
| 黒潮流型 | C | C | C | C | B | C | C | W/B | C | C/D | W/D | C |
| 合ノ瀬 | - | - | - | 45 | 50 | 50 | 55 | 40 | 40 | - | 45 | - |

* 印は水路部海洋速報による

とを示しているものと推測される。

沿岸水温：定線観測による和歌山県沿岸の海域別各層水温の年間偏差を図3に示した。

2001年の本県沿岸水温の概略は、1~7月頃まで平年並みで、8~9月頃の夏季を中心に高水温と低水温の変動が激しく、この変動は10月頃から落ち着いて、それ以降はほぼ平年並みであった。夏季に水温変動が激しかったことは、ほぼこの頃から潮岬沖の黒潮が離岸傾向から接岸基調へと移行しつつあったことと、何らかの関係がある可能性が推測される。

・紀伊水道内部 (日ノ御埼以北)

1月は低水温、2~7月はほぼ平年並み、8~11月は高め、12月は低めの水温であった。

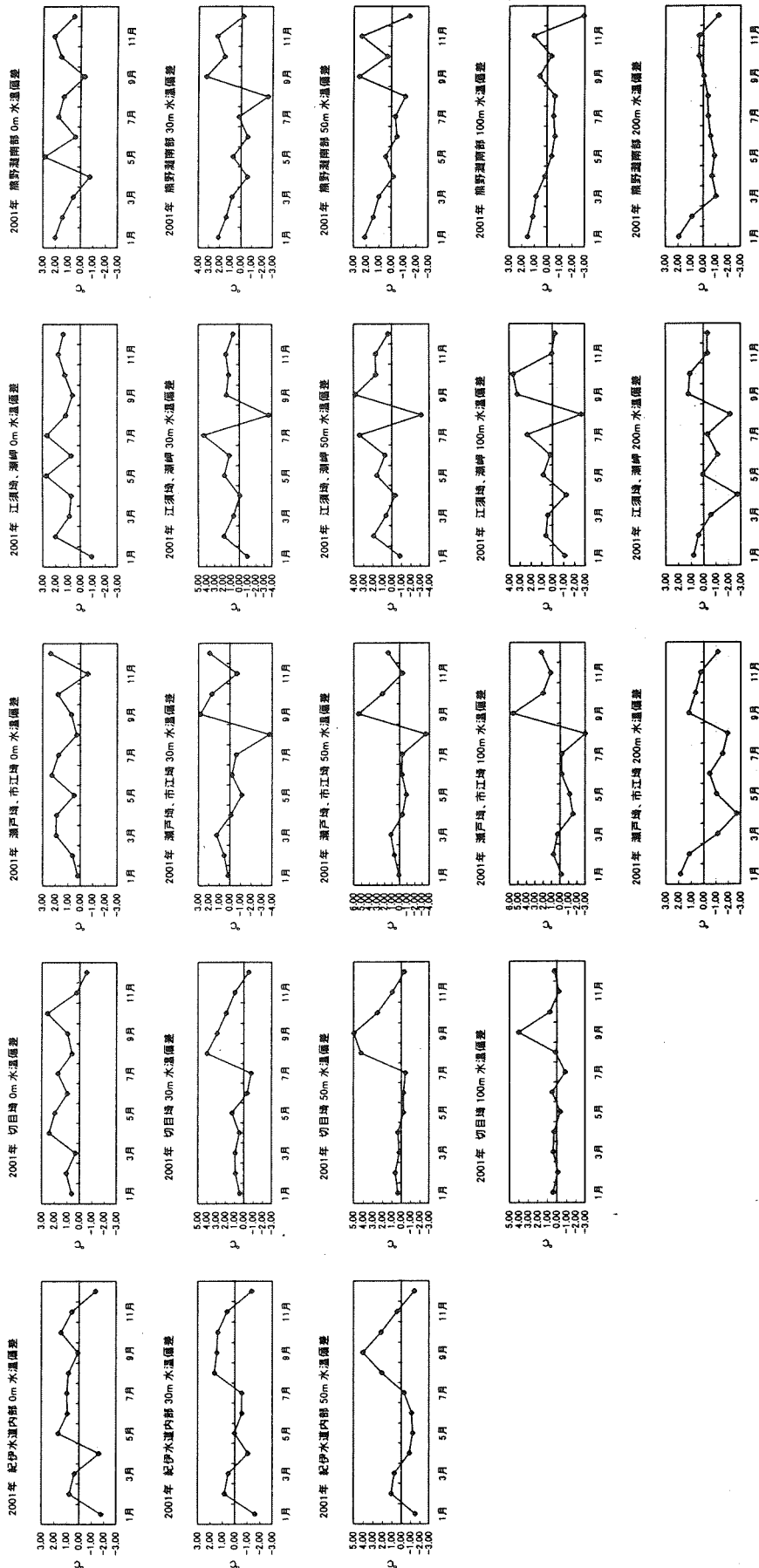
・紀伊水道外域 (切目埼~瀬戸埼~潮岬)

4月には瀬戸埼~潮岬の水深200mで低水温であった。7~9月の夏季には水深30~200mでしばしば高水温がみられた。ただし、同じ水深で8月には瀬戸埼~潮岬で低水温となった。それ以外は概ね平年並みの水温であった。

・熊野灘南部 (檜野埼~梶取埼~駒崎)

1~3月は高水温傾向であった。これは内側反流の影響と考えられる。8月に低水温、9~11月に高水温がみられた。それ以外は概ね平年並みであった。

定地観測については、串本の東岸と西岸における観測結果を図4に示す。串本東岸、西岸ともに、2001年



* 偏差の算出に用いた平年水温値は、76～95年の20年間の平均水温値である。

図3 2001年の水温平年偏差の経過

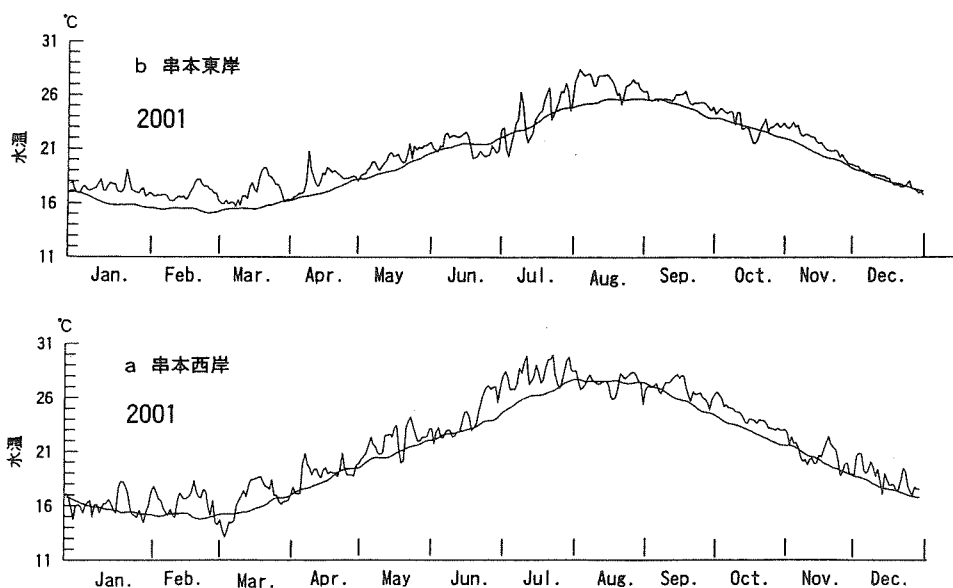


図4 串本東岸・西岸の定地水温

変動の大きいラインが2001 (H 13) 年の観測値、なめらかなラインが平年値を示す。平年値は1967 (S 42) ~ 1999 (H 11) 年の33年間から算出している。

は高水温傾向であった。特に東岸の1~3月は平年よりも高水温が続いた。これは熊野灘における内側反流の影響によると考えられる。

2 漁況

マイワシ: 2001年1~3月の紀伊水道外域~熊野灘南部への産卵親魚の来遊は低調であったが、4月上旬~5月中旬に大羽群が紀伊水道外域に例年になく来遊し、まき網によりまとまって漁獲された(南部町漁協1そうまき網5統4~5月176.1トン、田辺漁協2そうまき網5統4~5月295.7トン)。このまき網漁獲物は、体長範囲16~23cm、体長モード20cmで、肥満度が高く、産卵後であった。8月下旬に中羽群(0歳魚、2001年級群、体長モード13cm)がウルメイワシ0歳魚とともに熊野灘南部に来遊し、9月下旬まで定置網、串本1そうまき網で漁獲がまとまった(太地漁協定置網、9月47.3トン、串本1そうまき網、8月81.6トン、9月98.1トン)。この漁獲により、2001年の1そうまき網漁獲量は前年を大きく上回った。マシラスは、4月上旬~下旬に紀伊水道外域の田辺湾~南部湾で記録的な好漁であった(南部町漁協パッチ網3統4月107.9トン、対前年比433.3%、対平年比260.0%)。

カタクチイワシ: 紀伊水道内のパッチ網による春シラス漁は、3月19日に初漁があったが、4月中旬まで低

調に推移し、また漁獲物が小型のマシラス主体で漁獲金額が上がらなかった。4月下旬以降、カタクチシラス主体に変わり、7月始めまで平年並みの漁獲が持続している(箕島町漁協パッチ網16統1~6月499.1トン、対前年比78.1%、対平年比108.5%)。6月中旬から新規加入の小型群が漁獲された。秋漁は平年を上回ったものの低調に推移した。

ウルメイワシ: 串本周辺の棒受網による0歳魚漁獲量は、春季以降低調であったが、8月下旬~9月下旬の中羽群の来遊により、平年を下回ったものの前年を上回った(串本漁協棒受網4~11月129.5トン、対前年比63.3%、対平年比58.1%)。一方、南部町漁協棒受網では、前年をやや上回り平年並みであった(串本漁協棒受網4~10月291.9トン、対前年比120.4%、対平年比109.4%)。

サバ類: 2001年冬・春季における紀伊水道外域まき網による漁獲は平年並みに推移したが、マサバ1歳魚の加入が比較的良く、2歳魚の比率も高かった(2そうまき網8統、2~6月1499.2トン、対前年比134.6%、対平年比103.9%)。マサバは4月の調査で、体長範囲26~35cm、体長モード29cmであった。ゴマサバが漁獲主体である串本1そうまき網、熊野灘定置網では、前年並みの低調な漁獲が続いたが、定置網にゴマサバ0歳魚が前年より多く入網した。紀伊水道外域まき網による秋サバ漁は、マサバの来遊が少なく、前年・平年を下回る

不漁で推移した(2そうまき網、8～12月2150.9トン、対前年比79.2%、対平年比57.4%)。漁獲の主体はマサバが1歳魚(2000年級群)、ゴマサバが0・1歳魚(2000年級群、2001年級群)であった。

マアジ：2001年冬・春季における紀伊水道外域まき網による漁獲量は、前年、平年を上回った(2そうまき網8統、2～6月2297.3トン、対前年比119.4%、対平年比163.2%)。この漁獲物は2歳魚(1999年級群)主体で、6月の市場調査では、体長範囲18～29cm、体長モード23cmであった。熊灘定置網では、前年、平年を大きく下回ったが、5月に例年になく2・3歳魚が漁獲された。夏・秋季、紀伊水道外域まき網では、8月上旬～10月上旬に例年になくほとんど漁獲がない状態が続き、下半期の漁獲量は前年、平年を大きく下回った(2そうまき網、7～12月761.4トン、対前年比33.4%、対平年比47.0%)。漁獲の主体は春季に引き続き2歳魚(1999年級群)であった。0歳魚(2001年級群)は串本周辺～熊野灘南部の棒受網、定置網、紀伊水道内の定置網でかなり漁獲された。

カツオ：2001年1～3月上旬は、黒潮南縁の魚群が薄く、漁期ははじめから黒潮北縁に漁場形成がみられた。3月15日ころから本格的な春漁となった。このころから黒潮南縁(32°30'N、135°50'E)に漁場形成があり、3月23～24日には31°00'-30'N、136°00'-30'N付近まで出漁する船もあった。その後も、黒潮南縁にカツオ群が来遊していることが確認された。黒潮南縁では、1998～2000年にはほとんど漁場形成がなく、2001年は4年ぶりに本格的な漁場となった。

2001年春季3～5月の主要3港(串本、すさみ、田辺)の総計は889トンで、最近21年間では第10位の中漁年であった。沖泊操業が多くCPUEは76kg/隻とまずまずの漁であった。6月下旬以降、主漁場が熊野灘となり潮岬周辺では30cm級の小型魚が主体で漁況も低調となってほぼ終漁した。

魚体は漁期はじめの1～2月から39～45cm級の小型魚と53～55cm級の中型魚が主体で、例年漁期はじめに漁獲される60cm以上の大型魚は少なかった。4～5月は50cm級が少なく、42～45cm級が漁獲主体であった。6月は30cm、40cm、50～60cm級の幅広い組成であった。

一方、秋漁は38～40cm級を主体で25～55cmの幅広い体長組成で、9～12月の3港合計漁獲量は約10.9トンとやや低調であった。

ビンナガ：1月下旬に潮岬沖の黒潮南縁(32°30'-50'N、135°30'-136°20'E)に漁場形成があり、小～大型混じりのビンナガ(72～82cm、90～102cm)にカツオが混獲されてはじまった。2月末から黒潮北縁(33°05'-20'N、135°40'-136°10'E)が主漁場となった。3月に入ると、ビンナガからカツオ主体に変わりはじめた。4月上旬からカツオ主体でビンナガはわずかに漁獲された程度であった。ビンナガの好漁は、2/2-8、2/24-26、3/2-3、3/27-28頃みられた。串本における1～5月の合計漁獲量は約59トンで、最近20年間の第14位で、きわめて低調だった。

ひき縄による漁獲は、例年、70cm級の小型魚が主体である。しかし、1998、1999、2000、2001年と4年連続して90cm以上の大型魚が漁獲主体となり、80cm以下の小型魚はきわめて少なかった。

3 沖合・沿岸・浅海定線調査報告、海況・漁況情報の発行

(1) 沖合・沿岸・浅海定線調査報告

主な配布先 水産庁、水産研究所(中央、瀬戸内他)、都道府県水産試験場、気象庁、漁業情報サービスセンター、水路部

| | | |
|------|-----------|-----|
| 発行部数 | 沖合定線報告 | 45部 |
| | 沿岸・浅海定線報告 | 55部 |

(2) 海況・漁況情報

a)人工衛星画像海況速報 平成9年3月に導入した「人工衛星受信解析システム」を使用し、リアルタイムの衛星画像情報を適宜提供した。情報提供は解説を記載し関係漁協などへ60件ファックス送信した。

b)海況速報 漁業情報サービスセンターからファックス受信した海況速報は、県下関係漁協にファックス送信した。

c)南西東海沿岸海況速報 上記b)と同じくファックス送信した。

d)南西東海沿岸海況情報 適宜業種別広域漁況を関係漁協にファックス送信した。

e)沖合黒潮調査速報 調査船「きのくに」による本県沖合の黒潮とその内側域の漁場海況調査結果を関係漁協、関係機関にファックス送信した。発信先は64件、回数は10回である。

f)漁海況速報(第13-14号～第13-52号、第14-1号～第14-13号) 和歌山県沿岸、沖合を中心とす

る1週間の海況と漁況情報をファックス送信により提供した。発信先は87件、回数は52回である。

主な提供先 水産研究所(中央)、府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者。

g)その他

・毎週1回海況・漁況を広報(週間南紀ウィークリー、紀伊民報等)した。

・定地観測による水温測定結果は毎日、気象協会を通じて広報(和歌山放送)した。

・串本の東岸と西岸の養殖魚場に設置しているテレメーターブイの水温を毎日、養殖関係者にファックス送信した。

・毎日新聞に、海況と定地水温の情報を骨子とした釣り情報が毎週1回(金曜日)掲載された。

なお、人工衛星画像海況速報、沖合黒潮調査速報、および定地観測による測定水温については、インターネットによる本県のホームページに掲載した。

4 特徴的な海況と漁況などについて

2001年1~12月の特徴的な海況と漁況についてトピック的にまとめたものを付表に示した。本文と重複する項目もあるが、省略せず記載した。

付表 特徴的な海況と漁況などについて (2001年1～12月)

【海況と気象など】

- ・テレビニュースによると今年の春は黄砂現象が顕著で、北海道まで黄砂が飛んでいったとのこと。また菜種梅雨をもたらす前線が例年よりも南偏して日本上空が移動性高気圧の通り道となり、降雨日数が例年よりも極端に少ないとのことである。(気象協会によると4月の近畿地方の降水量は例年の10%以下とのこと。)
- ・衛星画像によると4月22日頃から24日頃にかけて、顕著な潮目が紀伊水道入口から紀伊半島西岸に沿って南東に伸びる特異な海況がみられた。このため日ノ御崎から白浜付近にかけての沿岸は冷たい内海水におおわれた。
- ・6月26～27日および7月17～18日に行った沖合定線観測において、黒潮本流域の表層20～30mの塩分が33PSU台という低塩分を観測した。8月29～30日の本観測では黒潮の表層塩分はやや元に回復し、34.1PSU前後となっていた。
- ・7月14日、大阪管区气象台は近畿地方が梅雨明けしたとみられると発表した。これは平年よりも5日早い。今年の梅雨期間中の雨量は、大阪145mm(平年276mm)、神戸145mm(平年254mm)と、平年を大きく下回った。
- ・7～8月、西日本から関東地方にかけて猛暑が続いた。また、まとまった雨が少なく、8月には各地で節水対策が行われた。
- ・8月3日に実施した江須崎～潮岬の定線観測、および8月6日に実施した瀬戸崎～市江崎の定線観測で、30m～200mの観測層で低め～かなり低めの水温を観測した。8月2日に行った熊野灘南部の観測でも30m水温がかなり低く、これは紀伊水道側の冷水が入り込んできたものと想像される。この冷水は、夏季に第2極小をもたらす亜表層水の上昇によるものと推測される。白浜町の椿定置網の水深25mに設置している自動記録式水温計の観測結果によると、7月11日に24～26℃から18～20℃への急激な水温低下がみられ、この低水温は水温計引き揚げ日の7月27日まで継続している。また、7月26～27日の人工衛星画像では、紀伊水道東部を中心に28～29℃から25～26℃への急激な水温低下がみられた。これらはいずれも底層の冷水が上昇し、水温躍層を突き破る形で我々の目に映ったために急激な水温低下としてみえたものと推測される。以上のことから7～8月は第2極小をもたらす低温水の影響が比較的大きかったと考えられる。
- ・8月7日朝、定地観測による潮岬燈台下の目視観測で、上り潮による潮波が観測された。潮波はシアイの瀬(潮岬よりほぼ南に伸びる瀬の通称)より西側に形成され、その分布域はやや西に膨らんだ円弧を描いて沖へと伸びていた。8月11日の昼過ぎには、調査船「きのくに」が潮岬沿岸を通過する際に、船上から上り潮の潮波が目視された。この時のADCP観測では西向きの2kt弱の流れを観測した。
- ・8月21日、台風11号が串本付近に上陸した。台風11号は動きが遅く、紀南地方に大量の降雨をもたらし、古座川や太田川では河川が氾濫して被害が出た。
- ・8月24日、潮岬燈台下の目視観測で顕著な下り潮が突発的に観測された。7月10日～8月23日の45日間の観測では下り潮は止まっているか、流れていても僅かであった。8月24日に流れ始めた顕著な下り潮は、9月7日まで15日間続いた。

- ・ 9月中旬～下旬、紀伊水道から熊野灘で高い潮位が続き、大潮時には高潮注意報が出された。
- ・ 11月15日頃～24日、潮岬沖の黒潮は接岸し、11月20日の沖合観測では距岸10マイルで黒潮本流を観測したにもかかわらず、潮岬燈台下の目視観測ではそれほど速い下り潮を観測しなかった。

【漁況と海洋生物など】

- ・ おおよそ2000年になってから潮岬沖の黒潮が離岸傾向で経過しているが、この期間に対応して紀伊水道内部海域でのヒラメやタチウオなどの底魚類の漁期が1～2ヶ月遅れる傾向にある模様である。
- ・ 例年、冬季を中心に潮岬周辺でメジロの遊魚船が多く出るが、今年はメジロが少なく、遊魚船もほとんど出なかった。いっぽう定置網では、45cm程度のツバスの入網が目立っている。
- ・ 1月10日、串本東堤防の調査船「きのくに」係留場所付近で、同じく県の取締船の碇を工事していたダイバーがサケガシラの稚魚を見つけ、タモ網で採集した。サケガシラの稚魚は体長約10cmで、採集後バケツの中で泳いでいたが弱っている様子だったのでホルマリン固定した。標本は試験場で保管している。
- ・ 1月、紀南の各港内でセグロカモメが目立った。沖合にはカツオやビンナガの餌となるイワシ類が少ない模様であり、同じイワシ類を餌とするカモメも餌が無いので港内に集まるのではないかとの推測もされた。
- ・ 例年、春先になると夜光虫 *Noctiluca scintillans* の赤潮が形成されるが、近年はこの赤潮の目撃報告の時期が早くなってきており、また目撃される地域が広域に広がる傾向にある。この傾向は今年も続き、今年には特に紀伊半島西岸の広範囲から報告があった。
- ・ 2000年12月～2001年3月にかけて、ビンナガ漁のCPUEが伊豆列島よりも東側で高く、西側で低くなる現象がおきた。これは伊豆列島まで張り出した黒潮が、ビンナガの西への回遊を妨げたことによると考えられた(遠洋水研)。
- ・ 4月11日朝、白浜町椿の定置網に体長5～6mのミンククジラが1頭入網した。この日はクジラと一緒に5kg前後のメジロがおおよそ200尾程度入網していた。組合員が網を切断してクジラを逃がしたが、その際に一緒に入網していたメジロのうちの約半分が逃げてしまった。
- ・ 2000年11月～2001年2月頃にかけて、印南の大型魚礁周辺に非常に多数のメジロの蝟集が続いた。
- ・ 2001年4月を中心に、紀伊水道の紀南沿岸域におけるイサキ一本釣り漁業は低水温により大不漁となった。しかし4月28日頃から海況が好転し、その後5月にかけては好漁となった。
- ・ 4月17日、日高町小浦地先でウミタルと数mm～数cmの小型のクラゲ類が高密度に発生し、水色が白色～ごく薄いピンク色に着色したのを水試職員が確認した。ウミタルとクラゲ類の他に、ノクチルカも混在していた。
- ・ 4月中旬頃から田辺沖を中心とした紀伊水道外域で大羽のマイワシが旋網により多く漁獲されている。

- ・ 4月、紀伊水道外域でマシラスが記録的な好漁であった。
- ・ 4月23～24日に実施した沖合定線観測で、潮岬沖で3度クジラを目視した。1回の観測で3度もクジラに会うことは稀である。
- ・ 4月19日、地元住民より新宮保健所古座支所へ、古座川河口に見慣れない藻類が多数漂着しているとの連絡が入った。試験場と保健所の職員が現場を視察したところ、アオミドロのような糸屑状で茶色の藻類が川の水際にたくさん漂っており、また川岸にも多く打ち上げられていた。試験場に持ち帰り検鏡したところ、褐藻類のシオミドロ目の一種であろうと判断された。この春季に降水量が少なかったことが、シオミドロの繁殖に一助したのではないかと推測される。
- ・ '01年の和歌山県の'01年のモジャコ漁は4月20日に解禁し、5月9日時点では採捕充足率は概ね10%であった。ところがその後、大量にモジャコが採捕され、5月9日からわずか5日後の5月14日には採捕許可数量をほぼ満たし、採捕打ち切りとなった。
- ・ 5月下旬、串本町からすさみ町にかけての定置網でサンマが大量に入網した。串本漁協ではこの季節はずれのサンマが同月24、25日の2日間で約2.4トンも水揚げされた。
- ・ 5月28日の沖合観測時に、潮岬南沖37マイル付近の黒潮本流域において多数の鯨類を目視した。目視した鯨類は吻と背鰭の形状からゴンドウ類と推定される。数量については数量化が難しく具体的には述べることができないが、およそ0.5マイルを航走中、継続的に鯨の姿を確認し続けたことより、相当数におよぶと考えられる。このときの鯨類の群は北を向いて移動していた。
- ・ 5月23日、18～19°N、140°E付近で操業した中南マグロ延縄漁船が全長およそ60cmのクサビフグを1尾、勝浦漁港に水揚げした。市場ではマンボウとして処理された模様である。
- ・ 紀伊水道のマルアジは、例年は5月始めに和歌山県側へ回遊して旋網（昼まき）で漁獲されるのであるが、今年はその来遊がなかった。
- ・ 美浜沿岸にシオミドロが大量に浮遊し、5月下旬～6月上旬に漁網に絡まるなどの被害がでた。県増殖水産試験場の職員が出向いて潜水調査を行った。
- ・ 6月26日の沖合定線観測において、潮岬南沖20マイルの黒潮本流域でイルカの群に遭遇した。黒潮本流内でイルカに会うのは稀な事である。この時は黒潮表層の塩分が33PSU台と低く、このこととイルカの出現が関係あるのかもしれない。イルカは5～6頭の群を成し、散発的に姿を現した。5～6頭の群が、さらに幾つかあるようにも見えた。
- ・ 6月27日、宇久井の定置網でカツオが朝持ちで1.9トン、夕持ちで2.4トン水揚げされた。これは、同日に紀伊半島東岸で起きた沿岸湧昇と関係があるのではないかと想像された。この沿岸湧昇は、6月24～26日にかけて日本海沿岸の梅雨前線に吹き込んだ南風によって発生したものであり、その模様は衛星画像にとらえられている。
- ・ 6月、熊野灘南部の北緯33°10'～40'、東経136°00'～20'に良好なカツオ漁場が形成され、近隣各県の曳縄や竿釣りで活況を呈した。ところがこのカツオ漁場は6月23日を最後に突如として消失した。これだけの漁場を形成したカツオ群が、いったいどこへ行ってしまったのかが分からない。
- ・ 今春季のカツオ曳縄漁では、漁期終盤の5～6月になって0.7～1.1kg未満の極小型から4.0～6.0kgの大型まで幅広い型のカツオが漁獲され、サイズの組成としてはきわめて

特異となった。例年は、0.3 ~ 0.8kg 未満の極小型は夏季~秋季に、大・中型は初漁期に漁獲される。

- ・ 6月に遊漁船の業者から聞くとところによると、昨年冬季以降、串本周辺の磯釣りや船釣りの遊漁が例年になく低調であるらしい。メジナを中心として、マダイやイサキなど極めて食いが悪いという。

- ・ 串本の浅海養殖漁場の業者によると、今年はマダイ等の魚の産卵期が例年より長いらしい。また6月下旬~7月上旬にかけて、串本港内でマダイの稚魚が目立っている。

- ・ 5~6月、和歌山県下の全沿岸域の定置網などでマアジの0歳魚の漁獲が目立っている。

- ・ 8月下旬から熊野灘南部で曳縄によるシビ仔(クロマグロ幼魚)の漁獲が目立ち、経験の長い地元漁業者によるとこれほどシビ仔の多かったことはないとのことである。このシビ仔は三重県側から南下した模様である。このシビ仔は10月中旬になって急に消えた。

- ・ 9月14日、紀伊水道の白埼沖(水深60~70m)の底曳き網でハモのアルビノ個体が1尾漁獲された。同様の白化ハモは9月20日と10月22日にも紀伊水道の底曳き網で漁獲された。また10月21日には金色のハモが淡路島南東沖の底曳網で捕獲された。これらのハモはいずれも県立自然博物館へ寄贈され、水槽展示された。

- ・ 10月12日、紀伊水道の旋網による秋のマサバが例年よりも約1.5ヶ月遅れて漁獲された。

- ・ 10月上旬~11月中旬、熊野灘南部の太地、宇久井、三輪崎の各漁港で、湾内に大量のマイワシが遊泳し、タモ網で容易にすくえる状態となった。マイワシの被鱗長モードは13cmである。地元住民の話によると、このような現象は、これまでに経験が無いとのことである。

- ・ 10月下旬、紀伊水道内部の湯浅の一本釣り(初島、沖の島周辺で操業)で全長20cm程度のオニアジが多く漁獲された。湯浅でオニアジが捕れることは稀で、湯浅漁協の組合員が何の魚か分からなかった程である。

- ・ 11月8日、白浜町富田沖の水深130mの海底に仕掛けた延縄で、全長25cmのウスメバルが捕獲された。ウスメバルは寒流系の魚で、これまで本県での生息の確認記録はない(2001.11.21.紀伊民報)。

- ・ 11月21日の沖合観測で午前7時頃、紀伊水道内部の下津沿岸付近で多数の箕島パッチ網がシリヤケイカ漁をおこなっているのを目視した。後日、漁模様を箕島漁協へ問い合わせたところ、この日の漁はもう一つであったとのこと。

- ・ 11月27日、熊野灘南部の宇久井定置網の朝持ちで、全長約20cmのホシフグ(*Arothron firmamentum*)が大量に入網した。全漁獲量が船2隻分のうち、目算で8割がホシフグで占められた。各種図鑑によるとホシフグは、時として大量に出現するものの、稀な種とのことである。地元漁師は本種を「はりふぐ」と呼びなしていた(ハリセンボンも「はりふぐ」と呼んでいる)。

なお11月28日の読売新聞によると、27日のホシフグ水揚量は約20tで、同時に十数尾のイトマキエイも入網したとのこと(読売新聞ではホシフグをコモフグと書いていた)。

- ・ 7月頃から11月現在に至るまで、紀伊水道外域の和歌山県側に旋網の漁場がほとんど形成されなかった。

- ・ 秋~初冬にかけて、宇久井定置網では小型マンボウの入網が目立っている。また潮岬沿

岸では、例年は5～6月に出現する尾又長 50cm 台の小型シイラが漁獲された。さらにアオリイカが、例年は 700g 程度であるのが、今年は 400g 程度と小型である。

・12月25日、宇久井定置網にホシフグとハリセンボンがコンテナ半分程度(およそ 300kg) 入網した。

・12月29日、樫野定置網の朝持ちで、遠洋水研のアーカイバル・タグを着けた全長 53cm、体重 2.7kg のヨコワが1尾、漁獲された。樫野定置網のヨコワは12月24～25日頃から若干入網し始め、12月28日には比較的多くの漁獲があった模様である。

・12月15日、宇久井でのイセエビ刺し網漁で特異的な好漁があり、総漁獲量が 859.6kg あった。この好漁は15日だけ宇久井のみにみられたもので、同日の田原の水揚げは平常であった。

・2001年末から2002年始めにかけて、熊野灘南部の宇久井から太地の定置網でハリセンボン(全長約 10cm)の入網が非常に多い。入網したハリセンボンは産業廃棄物として業者に買い取ってもらうが、その買い取り費用がかさんで困っている程とのこと。